

心温まる国 エルサルバドル

エルサルバドルという人口約 600 万人の小さな国を初めて知ったのは、2012 年に私がアメリカのワシントン州シアトルで留学をしていた際に現在の妻（エルサルバドル人）と出会ったのがきっかけだ。彼女と付き合い始めの時は将来まさかエルサルバドルで住むなど想像できなかったが交際をしていくにつれ彼女のバックボーンについて興味を持ち始めた。

しかしエルサルバドルを知るための文献があまりにも少なく、インターネットで調べて見てもショッキングなギャングの画像や治安に問題があるなどネガティブな情報が先行し自分が知りたい情報がなかなか手に入らなかった。

2013 年、留学を終え私は日本に、彼女はエルサルバドルに帰国し、それ以降は遠距離での交際になった。半年に一度は何方かが住んでいる国へ足を運び時間を過ごそうと口約束した。彼女が同年の夏に初来日してくれたので、私はエルサルバドル行きのチケットを買い 2013/14 年の年越しに渡航することとなった。

内心、エルサルバドル空港に到着するまでは、治安面でやや緊張気味の私であったが空港へ到着し税関、入国審査を済ませ出口を出るとそんな緊張は吹き飛んだ。そこには、大勢の現地の人々が今か今かと友人や家族が帰って来るのを待ち、熱い抱擁を交わし涙を流している姿があった。当時は言葉は分からなかったが胸を打つ光景であったことは間違いない。在住期間が 3 年経った今から振り返れば、これこそ何より家族や友人を大切にすエルサルバドル人を象徴している一つの風習であるのだと思う。



(画像 google より参照)

初めて訪れた際に特に印象に残っているのが、エルサルバドル西部アワチャパンにあるコーヒー農園とその近くにある精製工場を訪れた事だ。コーヒーチェリーが収穫されてから乾燥プロセスに到るまでを見学し、最後にコーヒーを嗜んだ。完熟したチェリーを注意深く手摘みで収穫している作業や、アフリカンベッドという網棚を使用したコーヒーチェリーを天日にあて乾燥させる作業を見学した際に、チェリーから放たれるハチミツのような香りは今でも忘れられない。そこで飲んだコーヒーは香り高いアロマで、フルーティな酸味とチョコレートのような甘みだった。『コーヒーは苦い飲み物』というそれまで頭にあった概念を覆された。

2017年度にエルサルバドルで催されたカップオブエクセレンス（国際最高品質コーヒー品評会）のオークションでサンタロサという農園のコーヒーが1ポンド\$95.70で取引がされるなど世界のコーヒー生産国の中でもトップクラスの高品質評価を受けている。エルサルバドルへ訪れる際は、ぜひコーヒー農園や精製場を訪れ美味しいコーヒーが作られていく過程を見て味わって欲しいと思う。



2015年10月に約3年の遠距離交際を経てエルサルバドル人の彼女と結婚し現地へ移住することになった。移住後はサンサルバドルの小規模ホテルを経営をしている。イギリスやドイツ、北欧などのヨーロッパ各地や南米、米国などから来る観光客をアテンドする度に彼らはエルサルバドルについてこう語った。

『到着した当初は治安面による不安や恐怖感が強かったが数日間過ごす中で、エルサルバドルが持つ魅力がわかった気がする。市内から海や湖、山や火山へのアクセスが良い事、過ごしやすい気候である事、そしてフレンドリーで温かみがあるエルサルバドル人が本当に気に入った。また絶対戻ってきたい。』

絶景の夕日が見えるコスタ・デ・ソルビーチや、ターコイズ色に反射するコアテペケ湖、ハイキングや登山にもってこいのイロマテペック火山など自然豊かな観光所もお勧めだが、一番の魅力はどんな苦境でも笑顔を絶やさないエルサルバドル人かもしれない。



内本 研（うちもと けん）氏

2015年10月結婚を機にエルサルバドルへ移住。サンサルバドル市コロニアエスカロン地区に位置する Morrison Hotel を経営。